

# 『新・おねーさんの耳はロボの耳2』

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

八月。

まぶしい青空と真っ白な雲。

木陰にはセミたちのひと夏のアンサンブル。

そう、今は夏真っ盛りなのである。

梅雨明けもなく、じめじめとした夏だか梅雨だか分からないようなそんな季節ではなく、  
とうの昔に秋の音が聞こえ始めてるなんてこともなくて、とにかく夏なのである。

そんな夏のある日のこと。

浩之が自宅に戻ると、やけにマルチが嬉しそうに、そしてそれとは対照的にセリオが困り顔を見せていた。

「どうかしたのか？」

居間に入ると同時に二人のどちらかに聞くとともに尋ねてみると、陰陽の陰の方、つまりセリオの方が苦笑気味に答えてくれた。

「どーしたもこーしたも…。さっきマルチが買い物に行ってきたんだけど、その途中で山本さんに会ったらしいのよ」

「へえ。で、それがどうして？」

それだけにしてはセリオの苦笑の意味が分からない。そう思っただけで浩之がさらに尋ねると、今度は陰陽の陽の方、すなわちマルチが本当に嬉しそうに答えてくれた。

「そうなんですよ。さっき買い物で商店街に行ったら、山本さんにばったり出会いまして、これを頂いたんです。福引きで当たったけど、自分は使わないからって」

とマルチは笑いながら、何かの券らしき物を浩之に差し出してみせた。

「何だ、こりゃ？」

と言いながら、それを手に取ると、どうやらどこかの入場券らしい。

「なにに：『ウォーターワールド アクア無料招待券』：って何だ？ どこかのタダ券か？」

するとマルチが嬉しそうに説明を始めた。

「それ、テレビでコマージュややってたんですけど、今年オープンしたばかりのおつきなプールなんです！ おつきな滑り台とか色々あって、面白そうなんですよー」

が、その説明の端々にどこか違和感を感じてしまったのは、浩之だけではないらしく、セリオもかすかに苦笑いを見せていた。

「おつきなプール？ おつきな滑り台？ ちょっと違うような気もするけど、マルチは本当に分かっているのか？」

おつきなプールと言う点においてははずれでもないだろう。が、おつきな滑り台と言うのはちよつと違うような気がしなくてもない。まあ、どちらにしても、それがマルチの言葉なのだからしょうがない。

「わたしもさつきからマルチに説明してただけど、この子にしては珍しく人の言うことを聞こうとしないのよね」

そこにセリオの、疲れ気味な言葉が続いた。その口調と表情から察するところ、かなり努力をしたように見える。

「それはお疲れさまだな、セリオも…。にしても、マルチがセリオの話もまともに聞こうとしないなんて、本当に珍しいな」

浩之がそう言うと、セリオは苦笑と言うよりは困ったような笑みを浮かべながら、ちらりと浩之の方を見て言った。

「まあ、その大元の原因は予想はついてるケド…」

「原因？」

「たぶん、商店街で山本さんに余計なことでも吹き込まれたんでしょ」

「余計なことって？」

「君の水着姿を見せれば、藤田さんもずーっと喜ぶぞ」とか、『夏なんだから、一度は藤田さんと一緒にプールでも楽しんでおいで』とか、ね」

「おいおい：誰が喜ぶって？」

とセリオの予想に反論を見せる浩之だったが、それはマルチの言葉であっさりと覆されてしまった。

「あれ？ セリオおねーさんってやっぱりすごいんですねー。どうして山本さんの言った言葉が分かるんですかー？」

「でしょ？」

マルチの言葉を受けて、セリオがにこりとしながら、浩之に返事を促したが浩之は何も答えることはできなかった。

「……………」

(パパさん、あんたって人は俺をどーゆー男だと思ってるんだ…)

浩之は内心そんなことを思っていたのだが、それと同時に、

(それにしても、マルチとセリオの水着姿か…。でへへ、悪くはないよな)

と言うようなことも考えていたのである。つまりはパパさんこと山本の人物評は正鵠を射ると言うことになる。

「浩之さん、いまスケベなこと考えてたでしょ？」

「セリオおねーさんは浩之さんの考えてることも分かるんですかー」

「だあー、いちいち人の考えにつっこみを入れるんじゃない！」

「ってことは肯定したってわけね？」

「浩之さん、本当にスケベなこと考えてたんですか？」

「……………もう、勝手にして」

と、その場は相変わらずのやりとりを続けながらも、近日中にその『アクア』へ三人で出掛けることに決まった。なお、念のために言っておくが、この作品に登場する団体名などは実在のものとは一切関係ない。どこのゲームの発売元と同じ名前なのは単なる偶然である。

お決まりのお断りはさておき、行くと決まったのはいいのだが、それはそれで浩之にとってはいくつかの問題を残していた。

『新・おねーさんの耳はロボの耳2』

まずは水着。

何と言っても水着。

くどいようだが、マルチとセリオの水着。

きわどいデザインで攻めるか、世の男どもに人気が高い（と言われてる）ストラップレスのワンピース（本当にどうしてだろうか？）か、浩之や読者の妄想は尽きることがないのだが、先立つものがないのである。

「こんな時は、ネコ型ロボットが欲しいと思ったりするな…」

思わず浩之が漏らしたつぶやき。それがどのような意味を持つのか、知ってる人には納得できるだろうが、あいにくとセリオとマルチのデータにはそれに該当するような項目はない。

怪訝そうに浩之の方を見つめながら、セリオはひとことだけ冷たく言う。

「…浩之さんって、実はネコフェチ？」

「誰がだ、誰が。昔見たマンガに出てきたロボットの話だっ」

「あら、そーなの？ ほら、もし浩之さんがネコフェチだったのなら、わたしやマルチにネコ耳とか付けなきゃいけないかなって思ったのに」

「何だか残念そうだな、セリオ」

「ただでさえロボ耳が付いてるんだから、それをネコ耳にかえるだけでしょ？ だったら、せっかくだから可愛い方がいいじゃないの、ねえ？」

「…：…考えておくよ」

と言ったものの、それをやってしまうと作品のタイトルが『おねーさんの耳はロボの

耳』ではなくて『おねーさんの耳はネコ耳』になってしまうので、さすがにそれをメインとする作品はあり得ないことを先に言っておこう。が、浩之をはじめとして、読者の方々が勝手に妄想するのは自由である。

(ネコ耳のマルチは割とありがちかも知れないけど、ネコ耳セリオってのはどうだろう？ ちよっときつい感じがしなくもないけど、いかにもネコらしくていいかもな…)

と言う具合に浩之が妄想にふけってるところだが、このままでは話が脱線してばかりなので、話を進めるとしよう。

「でも、本当のところ、浩之さんの経済状態じゃ、わたしとマルチの水着は無理よね…」

セリオは的確に浩之の経済状態を判断した上で言ってるのだから、それに逆らうことは無駄な努力と言えるだろう。

「そうですか…」

その言葉を受けて、マルチはこれまでの陽気さとはうって変わって、がくりと残念そうにうなだれてしまった。

確かにセリオの言うとおり、浩之にはもうそんな余裕はない。だが、マルチの様子を見てしまっただけで、何がどうなってもどうにかしなければと言う気持ちに突き動かされてしま

う。  
「うーん、いや、何とかするよ、マルチ。それにセリオも」

「ホントですか!」

「無理しないでいいわよ」

これまた見事に異なった反応を返すマルチとセリオだが、セリオが冷めた言い方をして

るのは、浩之の言い方が少しばかり気になったからでもある。その証拠に、

「どーせわたしは『それにセリオも』なんだから」

と、あからさまに浩之に対して不平を述べたりする。だが、さすがにセリオとのつき合いの長さからか、浩之はかすかに笑うだけである。

「とにかく、二人とも俺に任せてくれ」

「はい、楽しみにしてます」

「あまり期待しないけど、厄介ごとには手を出さないでね」

マルチの期待とセリオの心配を受けながら、浩之はただ笑みを浮かべて、それ以上は何も答えなかった。しかし、その時の浩之の頭にあつたのは、自分の金でどうにかするとしようという立派な心がけではなくて、

（ま、言い出しつべはあの人なんだから、ここはパパさんに相談してみるべきだよな）

と言うように、完全に他力本願状態だったのだ。しかも、

（二人の水着かあ……。どんなのが似合うかな？）

すっかり妄想モードに入ってしまうのだった。

マルチとセリオの二人に水着の約束をした翌日、浩之は用事があると言って外出していた。が、それはいいわけに過ぎず、外出した先から山本に連絡を入れるつもりだったのだ。

浩之は研究所の近くの喫茶店に入り、そこで山本を呼びだした。考えてみれば、お金の無心に来た立場のくせに相手を呼びだそうと言うのだから、随分と偉そうである。が、その時も浩之はそんなことは微塵も考えておらずに、ただ二人の水着姿を想像してただけと言う実に平和な男である。もっとも、浩之がこんな男なればこそ、マルチとセリオの二人

とうまくやっていけると言うのも一つの真実だろう。と同時に、決してそれだけ（ただ二人の水着姿を楽しむだけ）の男ではないことも真実である。

（マルチは：体が小さいから、あまり選ばないかも知れないけど、それならそれで、あいつに似合った可愛いデザインなんかいいだろうなあ。で、セリオはあれで結構プロポーシオンはいいから：選びがいがあるってなものだ）

相変わらず水着のことしか考えていないのは、当面の問題がそれだからであって、普段はもう少しまともな男である……はずだ。

そんな風に浩之が楽しい妄想にふけりつつ、アイスコーヒーを飲み干そうとしたころになって、ようやく山本が喫茶店に姿を見せた。

急いできたらしく流れ出た汗を拭きながら、浩之のいた席にやってきた山本は真顔で浩之に声をかけた。

「一体どうしたんです？ 二人のことで相談がある、なんて……」

浩之は電話では詳しいことを何一つ話さずに、ただ相談があると伝えただけである。そんな電話をもらってしまった山本の方は気がでないのだが、すぐにすつ飛んで行くわけにもいかない。ひとまず外出できるくらいに仕事をすませて、急いでここに来たという次第である。

「あ、山本さん、まずは冷たい物でもどうですか？」

真剣な山本とは対照に浩之の調子は至って軽い物だった。

「それじゃ、私はオレンジジュースを……」

と、山本はお冷やを持ってきた店員に告げながら、浩之の真向かいに腰を下ろした。そ



して、座るとすぐにまた浩之に向かって尋ねる。

「それで用件は一体？」

浩之にとって用件はただ一つ。「金をくれ」もしくは「水着をどうにかして欲しい」。が、それをそのまま言うのも抵抗があるし、浅ましいことこの上ないではないか。

どう切り出そうか浩之が悩んでいると、山本は怪訝そうな表情で言った。

「言いくいことですか？」

しかし、最初から目的は決まってるのだから、余計なことをしてる時間はない。それにチケットのことから切り出せば、山本もすぐに分かるに違いないと思った浩之はようやく心の準備をすませ、

「あ、その：チケットのこと……」

と浩之が切り出そうとした時、

「お待たせしました」

その声と共に山本の目の前にオレンジジュースが置かれた。

「藤田さん？」

ちようどいい間合いで話をつぶされてしまった形になり、浩之はさっきの言葉の続きを言うことができない。

「……………」

当初の樂觀的な見通しとは裏腹に、どうにも分が悪い状況にあって、浩之はすっかり言葉失っていた。

すると。

「チケットって…あの、マルチにあげた入場券のことですか？」

山本の方からその話題を切り出してきたではないか。

「あ、ええ、それなんですけど、本当にありがとうございます。あれからマルチがずっとはしゃいじゃって大変だったんすよ」

「ははは、あの子はこの場所に行くのも初めてですからね。すごく楽しみにしてるでしょう？」

「もーそりゃ本当に楽しみにしてますよ」

とここまで普通の世間話をしてる自分にハタと気がつく浩之。

「そ、そうだ、俺はこんな世間話をするために来たんじゃないんだ！」

「何だか藤田さんには悪いことをしてしまったかも知れないですね」

相変わらず微笑みながら楽しそうに語る山本だが、この展開は浩之にとって悪いものではない。

「そ、そーそー。それなんですけど…山本さん？」

「それ？」

「いや、だから、俺の苦労も分かって頂けると嬉しいんですけど…」

わずかに山本の表情がくもる。

「苦労ですか？」

「ええ…、つまりですね？」

「はあ…」

「二人にお似合いの水着を用意してあげたいんですよ、俺としては」

浩之としてはさりげなく言ったつもりだった。話の流れもそう言う方向に進んでいたし、それはごく自然な流れだったと。

だが、それは確かにそうだった。ただ、浩之の思惑とは違っただけで。

「さすがですね、藤田さん」

そう言う山本の表情には怪訝そうなものは何もない。

「へ？」

「水着をプレゼントするなんて言ったら、あの二人も喜びますよ」

「ええ、まあ……」

「それじゃまずまず、あの入場券をマルチにあげた意味があると言うものですね」

「はは……はあ……」

（どーも展開が狙った方に行っていないような気がするんだけどな）

と、そこに山本のとどめのひとこと。

「いやー、本当に楽しいひとときでした。それじゃ、私はまだ仕事がありますので、これ

で失礼していいですか？」

「あう……あの、山本さん」

「あ、この払いは私が出しておきますから、藤田さんはゆっくりしてってください」

（そーじゃなくて！）

と焦る浩之をよそに、山本は立ち上がろうとする始末。このままでは事態は好転しない。

（ええーい！ 今さら面子も何もねーや！）

窮した浩之はつい本音をさらけ出すことにした。

「山本さんっ！ その水着のお金なんですけど、全部出してとは言わないからいくら協力してください！」

すると、山本は急に真面目な表情になり、再び席に座るとゆっくりと語り始めた。

「…藤田さん、本気ですね？」

「はいはい、本気です」

山本の質問の意味もさっぱり分からぬままに浩之がうなずくと、山本は急に笑い出した。

「くっ、はははははは……」

「え？ 山本さん？」

「いや、これは失敬。でもね、あの入場券をマルチにあげた時点で、二人の水着を用意する必要があるので私も分かかってたんですよ」

「つーと？」

「日頃から藤田さんにはこっちも悩まされることが多いですから、たまには仕返しみたいなことをしてやろうと…。あの二人の水着についてはちゃんと私の方でリサーチして、用意してありますからご心配なく」

「や、山本さん…あんたって人は……」

図らずも山本の意外な一面を見ることになった浩之は、水着の心配がなくなった安堵感よりも、自分の目の前にいて楽しそうに笑っている山本の性格に軽いめまいを感じてしまっていた。

と同時に、

(あの二人にして、この人あり…ってな感じか)

妙に納得してる部分もあった。もっとも、この場合は「あの二人」と言うよりは、「あのセリオにして」と言い換えた方が正しいかも知れない。

こうして、何とか浩之が水着の約束を果たして…と言うのが正しいかどうか今ひとつ言い切れないが、何はともあれお楽しみ『アクア』へと行く日がやってきた。

その日は朝早い時間からマルチが大騒ぎを起こしていた。と言っても、それだけ楽しみにしていた裏返しであるので、雰囲気そのものは非常に微笑ましいものだ。

「ええとええと、あれを持ってくんですよ？」

「おいおい、あれじゃ分かんないよ、マルチ」

「浩之さんの替えの服と…歯ブラシと…」

「別に旅行に行くわけじゃないから、そこまで考えなくてもいいのよ？」

「あつ、そうですねー。わたし、ずーっと楽しみで楽しみで…何をどうしたらいいのかすっかり分らないんです」

「ま、それだけ喜んでもらえると、俺も嬉しいけどさ、マルチ」

「はい？」

「もうちょっと落ち着こうぜ？」

「はいっ！」

と嬉しそうに答えるマルチだが、そこには「落ち着き」など微塵も感じられなかった。それを見て、かすかに不安に感じた浩之だったが、それには何も触れずにいた。

「さて、それじゃぼちぼち出るとするか？ 山本さんにはプールに行く前に、時間に余裕を持って研究所に来るように言われてるしな」

喫茶店に山本を呼びだして、水着のことを聞かされた後、山本は『アクア』に行くにあたってマルチとセリオの準備が必要だから、研究所に来るように告げていた。だが、その準備とは何を指すのかまでは浩之は聞いてない。

研究所に着くと、早速マルチとセリオは山本に連れて行かれてしまい、浩之はそのまま小一時間ほど待たされる結果になった。

そして、一通りの作業を終えた山本が

「お待たせしました」

と言いながら出てきて、次いで二人の姿が見えた時。

浩之は思わず言葉を失って、二人の姿を見つめるだけだった。

「お待たせー」

「あの…変ですか？」

明るくにこやかに挨拶をするセリオと、少しだけ恥ずかしそうなマルチ。

「…そ、それって……」

しかし、浩之はまだまともに答えられない。そこに山本の声。

「どうですか、これならとてもロボットには見えないでしょう？」

との言葉通り、山本の後に続いて現れた二人の姿は、すっかり普通の女の子であった。

マルチもセリオも、ロボ耳をはずした状態の上に髪の色を黒にされていた。セリオはもちろん自在に髪の色を変えられる（本作品における独自設定）のだが、マルチまでが黒くなったと言うのは、染めたと言うことになるだろう。

また、セリオの方はその黒髪をアップにしてある。これは水に濡れた場合を想定しての処

置であるが、普段見るセリオとは印象ががらりと違うから不思議である。

「メイドロボットの髪の色が目立つ色になってるのは、一目でロボットと分かるようにと言う理由からですが、今回は目立つのはよくないでしょうから、こちらの方でマルチの髪を染めました。それと、通常状態ではメイドロボットの浮力が足りないのです、それを解消するための処置を行っています」

山本がやった作業について説明をしているものの、浩之の視線はすっかり二人に釘付けになっている。

（そっか、マルチの黒髪って悪くないじゃんか。それに、アツプにしたセリオの、あのほつれ毛が何とも色っぽいか、なあ？）

その視線に気づいて、マルチが照れながら

「あ、あの……そんなに変でしょうか？」

と言ったが、そこにセリオが言葉を重ねる。

「あら、とつても可愛いわよ、マルチ。浩之さんだって、あまりの可愛さに言葉を失っただけなんだから」

いつもならそこで浩之の反論が出るところだが、この時ばかりはそうはならず、

「うん……ホントに」

とぼつりとつぶやくように肯定したのだった。すると、マルチは一層顔を赤らめてしまい、セリオはあきれたように笑うのだった。

「えっ」

「あらあら……」

「…本当に藤田さんはそーゆーことだけは正直ですわ……」

山本のつぶやきを聞きながら、浩之は相変わらずマルチに…いや、二人に見とれていた。そこまでの山本の手際のよさには、何も不審に思うことなく。

とにかくこうして準備を終えた浩之たちは、それぞれが期待を胸に抱きつつ研究所を後にした。

浩之たちは『アクア』に行くのにバスを利用していたのだが、その途上ではすれ違う誰もがマルチとセリオがロボットなどと言うことに気づかずだった。

専門家がじっくり見れば気づくだろうが、すれ違ったくらいではほとんど人間と変わらない。時折振り返る者の姿も見受けられるが、それは別の理由によるものである。

「時々人が振り返るけど、目立つのかな？」

浩之が周りを見ながらつぶやくと、セリオが微笑みながらそれに答えた。

「ロボットだから振り返ってるんじゃないかって、わたしが魅力的だからすれ違う男性がほっとかないだけよ」

そんな言い方をするセリオに、いつもならば「何言ってるんだ」と返す浩之だが、今回は素直にうなずくのだった。

「…まあ、確かにそりゃ言えるだろうな」

「ありがと、浩之さん。それに、わたしだけじゃなくて、マルチも可愛いから自然に人の目が集まるのね」

「そうですかー」

「しかし、そうやって目立つのもちよっと問題があるかも……」



「しょうがないわね。まあ、両手に花って状態なんだから、いーじゃないの」

目立たないようにと山本が行った処置が、かえって目立つ状況を呼ぶと言うのは皮肉なことではある。しかしながら、浩之はまんざら悪い気はしていないのが本音だった。

(両手に花、ね…。確かに悪くはねーよな)

セリオたちがまだ普段着の状態であるに関わらず、それだけ注目を浴びてると言うことであって、この後二人が水着姿になった時の状態を予測するのは至って簡単であろう。だが、この時の浩之は締まりのない表情をするだけで、それすらも分かっていたいなかった。

そして、お楽しみ『アクア』である。水着である。

中に入った後、それぞれ更衣室へと別れたが、今回のような場合マルチとセリオが一緒であると言うのは浩之にとっては非常にありがたかった。と言うのもマルチ一人にすると、何が起こるか分からないのだ。さりとて、女子更衣室に浩之が入るわけにもいかない。

素早く着替えた浩之がプールの方で待っていると、しばらくしてから二人の姿が見えた。

さてさて、問題の水着だが、どのような感じかと言うと。

マルチは明るい配色のフラワープリントのワンピース。セリオもワンピースだが胸の切れ込みが深いもので、ややハイレグと言うところの落ち着いた配色のものだ。あえて詳細に書き込まないのは、作者のセンスのなさを露呈するのを避けるためだが、同時に読者それぞれにご想像いただきたいと言う主旨であるので、承知して欲しい。

余談ではあるが、水着(や下着)の格好の画面と言うと、何故か乳首が必要以上に強調されてると思うのだが(原作だけでなく、こうしたゲームなど全般的に)、あれはかえって興ざめする(と言うか、こっぴどかしい)だけだと思うのだが如何なものだろうか。

と作者のたわごとはともかくとして、マルチとセリオの様子だが、マルチは胸の前で手を組んで恥ずかしそうに、セリオは腰に手を当てながらモデルさながらの堂々とした歩きっぷりをしている。

「お待たせ」

「あの……………わたし……………」

二人は浩之のところまでやってきたが、浩之はただじつと二人の水着姿を見つめるだけだった。さらには、この時点ですでに二人は周囲の視線を集め始めていた。

「……………」

浩之が何も言わずにいと、マルチはさらに顔を赤らめてうつむいてしまう。

「あの……………似合いませんか……………」

そのしぐさはマルチの恥じらいと言うものを十二分に語っている。これで落ちない男は少ないかも知れないほどの強力な武器である。浩之が返事もせずに見とれていたのはしょうがないと言えるだろう。

「浩之さん、どうしちゃったの？」

セリオがわずかにあきれた様子を見せながら声をかけると、ようやく浩之は

「あ……………あ……………」

と生返事をするのだった。

『『ああ』じゃなくて、似合ってるかどーか聞いているのよ？』

セリオがさらなる返答を求めたものの、浩之は相変わず

「ああ……………」

と生返事を返すだけ。

「やれやれ……、マルチの可愛さに言葉も出ないってわけ？」

セリオが苦笑気味にそう言うと、浩之はうなずきながら

「ああ……………」

と生返事。

それでもマルチには十分伝わったらしく、恥ずかしそうにしながら同時に、

「嬉しいですー」

と極上の笑みを浮かべるのだった。そして、セリオも微笑みながら言う。

「そりやもつともでしょうけど、わたしもまんざらじゃないでしょ？」

それに対して浩之はまたもうなずくだけ。

「すっかり言葉をなくしちゃったみたいね、浩之さんは」

「わたし……………似合ってますか……………」

あきれた様子ながら、どこか嬉しそうに微笑むセリオ。

恥ずかしそうに再度浩之に確認するマルチ。

そんな二人を前にして、浩之はしばらくの間、ただ「うんうん」とうなずくだけだった。

その後二〇分ほどその状態を続けてから、ようやく浩之もまともに喋るようになり、本

格的に『アクア』を楽しむことになったのだが、ただでさえ注目を浴びていた二人だけに、本

水着になってさらにチェックが激しくなったのは言うまでもない。

さて楽しむのはいいのだが、この場合浩之が保護者になる必要があるのはマルチである。

比べるまでもないのだが、セリオは一人でも平気だが、マルチは一人になるとどうなるか

分らない。従って、

「セリオ、悪いけど俺は……」

「分かってるわよ、マルチが心配なんでしょ？ わたしも浩之さんはマルチのそばから離れない方がいいと思うから、マルチの好きにしてあげて。わたしは二人の場所を確認しながら、適当にやってるから気にしなくていいわよ」

「セリオおねーさん、いいんですか？」

「いいからいいから。それにマルチはアレやりたいんでしょ？」

とセリオが指さしたのは大きなウォータースライダー。マルチが言うところのおつきな滑り台である。

「楽しんでらっしゃいな、マルチも浩之さんも」

にこやかに告げるセリオの言葉に、マルチも浩之も気をよくして

「それじゃセリオ行って来るよ」

「おねーさん、すみません」

と嬉しそうにしながら、おつきな滑り台の方へと消えていった。

その二人の姿を見送りながら、セリオはプールサイドにあるベンチに腰を下ろして周囲を見回した。

「やれやれ、浩之さんたちの子守も大変ね」

などつつばやきながら、周囲の様子を確認していると、見知らぬ男が声をかけてきた。要はナンパである。

まっとうなメイドロボの場合、このような事態ではすぐにロボットらしさを露呈すると

ころだが、セリオは違う。

適当に男に返事をしながらも、浩之とマルチの位置を正確に把握しているのだ。もちろん、ナンパ男の神経を必要以上に逆なですることもせず、それはもう見事にあしらってると言えるだろう。

一方、マルチたちの方はおっきな滑り台へと向かって、早速それを堪能していた。自分たちの位置や様子をセリオがちゃんと把握してることなどは、もちろん二人には分かっていないし、何よりその時は浩之もマルチも、セリオのことは全然頭になかったと言っているくらいだ。

「これです、これ。浩之さん！」

マルチはもうすっかり上気した様子で、目の前にあるおっきな滑り台を指さしている。

そして、浩之もそんなマルチの様子につられて楽しそうに答えるのだった。

「おいおい、マルチ、あんまりはしゃぐと止まったりしないか？」

止まると言うのは興奮しすぎてブレーカーが作動したり、熱くなつて止まったりしないかという意味だが、マルチはにこやかに答えた。

「はいっ、平気です！ 山本さんの話だと、冷却液を換えてあるそうで、いつもよりは放熱効果があるそうですから。それに、ブレーカーの設定をやや緩めにしてあるそうです」

「そっか、それならまだまだ平気だな？」

「はいっ！」

と言う具合にマルチの小気味いい返事を受けて、浩之もマルチ同様に楽しむことに専念することにして、おっきな滑り台へとマルチの手を引っ張り、走り出した。(注：プール

サイドで走るのは危険なのでやめましょう)

「そら、行くぞ」

「はい」

ハタから見れば浩之とマルチの組み合わせは、大学生と小学生の組み合わせのようでもあり、ある種の危険な香りすら漂ってくるのだが、本人たちしてみればそんなことは関係ない。ただ、いずれにしろ、浩之とマルチのペアにしても、セリオ同様に注目を呼ぶのは避けられない。

何はともあれ、こうして念願のおつきな滑り台（念のために書いておくが、これはウォータースライダーのことである）をマルチが満喫していた頃、セリオの方は周りをすっかりナンパ男どもに囲まれていた。

単調なやりとりに飽きてきたのだが、男どもはそう簡単にセリオを解放しようとはしない。適当に愛想笑いを浮かべながらも、セリオは男の群れをどうにかしようと思いはじめた。

さすがのセリオも参るほどのだから、これまでナンパ男どもの提供した話題がいかにつまらないものであるかを推察していただくとして、とにもかくにも、このままではちががかない。

「ちょっと失礼」

そう言いながらセリオはにこやかにベンチを立て、その場を去ろうと試みた。が、もちろん、男どももぞろぞろとついてくる。口々に「どこ行くの?」とか「飲み物なら俺買ってくるよ」とか、およそ言うであろう言葉を発しながら。

セリオは何も答えずにそのまま大きなプールの方まで歩いていき、くるとナンパ男どもの方を向いたと同時にひとこと。

「わたし、特定の人以外とは親しくできないの、ごめんさい」

そしてまたプールの方を向いたかと思うと、そのまま綺麗なフォームで飛び込み、ナンパ男たちがあっけにとられてる間に反対側へと泳いでいってしまった。ちなみに泳ぎ方はノーブレスのクロールで、余計な水しぶきなどがない見事なフォームだった。

「すげえ……」

男たちの誰かが嘆息まじりにつぶやいた頃には、セリオは反対側へと上がって、一度浩之たちに合流するつもりで、二人のいる方へと向かっていた。

セリオには二人の居場所が分かっているため、合流するにはセリオが二人のところに行くのが一番手っ取り早い。それに、ただでさえうるさい男どもにもまとわりつかれているので、ぼちぼち浩之と一緒に行動する方が望ましいと判断してのことだが、セリオが二人の方へと向かっている最中になお幾人かの男がセリオの後をつけていたのだった。

もちろんセリオにはそれも分かっていたが、ここは浩之を見せれば余計な男もいなくなるだろうから、まずは放っておくことにしていた。

そして、浩之たちからもセリオが確認できる位置まで近づいた時、セリオは手を振りながら浩之に声をかけた。

「浩之さーん」

すると、浩之とマルチもそれに気づき、二人とも手を振って答えてくれた。と同時に声をかけたセリオに向かっていた視線が、一気に浩之のもとに集中することになった。

「な、何か知らないけど、周りの視線が痛いよーな？」

「そうですかー？」

一気にナンパ男どもの激しい嫉妬の視線を受けることになった浩之が、周りをきよろきよろと眺めていたが、それは強さを増すばかりである。と言うのはもともとマルチを連れている時点でそれなりの攻撃を受けており、セリオのひとことできさらに食らってる状態なのだ。

少々大げさな言い方をすれば、『アクア』に来ていたナンパ男どもの激しい嫉妬の視線を浩之は一身に受けていたと言っても過言ではないだろう。逆に、それだけマルチとセリオが注目を呼んでいたと言うことになる。

「うーむ、やっぱり周りの目がどうもギラギラしてるような気がするんだがな…」  
浩之がそうつぶやいてると、そこにセリオが近づいてきて、苦笑しながら告げた。

「すっかり人気者になっちゃったみたいね」

「あれ、セリオ？ 濡れてるけど、泳いだのか、お前」

「ちよっと、ね。水は冷たくて気持ちよかったけど、あまりやらない方がよかったかも。それでそっちは十分楽しんだの？」

「はいー、すごく面白いですよ、セリオおねーさんもやりませんか？」

「それはいいけど、浩之さん、どうするの？」

「どうって？」

「さっきも言ったけど、結構人気者みたいだけど？」

とセリオが周りを見回すしぐさを見ると、浩之にもその言わんとしてることが理解でき



た。

「なるほど…。さっきから視線を痛く感じていたのは、気のせいじゃなかったんだな」

「どうしたんですか、浩之さん？」

マルチだけはさっぱり状況が分かっていないようであるが、これはこれでマルチの魅力なのでよしとしよう。

「何ごとも起きなきゃいいけどな…。セリオの方はいちおう周りの様子に注意してくれ

よ」

「ええ、それはもちろんやってるけど、ただ普段よりちょっとセンス能力が落ちてるの

よ」

「どうして？」

「研究所で水中活動用のセッティングをしてくれたから…。そうでないと、泳ぎなんてできないうもの」

「ふうん…。ま、後はしばらく三人で行動してれば大丈夫だろ？」

「だいたいけど」

話してる内容は結構深刻なものだったが、ハタから見てもしまえば、それは仲のいい者同士の会話にしか見えない。まして、嫉妬に燃えるナンパ男どもにしてみれば、非常に気に入らない光景でしかない。

いささか強引な気がするが、こうして真夏の事件は起きるのである。

「それじゃ、まずはあつちで休むとするか？」

浩之がそう言って、歩きだそうとした時。

「浩之さん、左！」

セリオが叫んだと同時に、浩之は突如走り寄ってきた男の一撃をかわす。

「さんきゅ、セリオ」

突撃男の一撃をかわすとすぐに浩之は、そいつの腹を目掛けて蹴りを一発。

「ぐへっ」

鈍い音とともに突撃男がその場に倒れたのが、合図となった。

それまでただ睨み付けていただけの男どもが一斉に浩之へと向かってきたのである。

「んな冗談じゃないぜ、何で俺がこんな目に！」

浩之がそう叫びながらマルチの手を取り、逃げようと試みる。

「まあ、しょーがないんじゃない？ 両手に花なんだから」

動じることなくセリオが答え、浩之の後に続く。

「皆さんどうしたんでしょうか？」

マルチが浩之に引つ張られながらそう言うと、セリオが余裕の笑顔でそれに答えてくれた。

「マルチがあんまり可愛いんで、浩之さんに嫉妬してるのよ」

「そ、そうなんですかー」

とそんな状況であるにも関わらずマルチはぼつと顔を赤くしてしまう。もちろん、それが余計に周りの男どもを扇情させるのだから困ったものである。

ひとまず人の多い方へと逃げるつもりで浩之だったが、ナンパ男どもは結託してか、たまたまそうなったのか。見事に三人を囲むようにしてその道を阻んでしまう。

「やれやれ…この人数相手に勝つ自信はあるけどな…ここで騒ぎを起こすのはちょっとなあ…」

数人に囲まれた状態でそうつぶやいた浩之だが、それは確かに誇張でも虚勢でもない。ただ、それは浩之一人であった場合の話であって、マルチとセリオがいるとなると未知数なのだ。

「…やっちゃってもいいわよ、マルチはわたしが守るから」

「何言ってるんだよ、セリオだってちゃんと俺が守ってやるさ。せつかくそんな素敵な水着を着てるんだから、こんな時ぐらいは普通の女の子らしくしてもいいんじゃないか？」

「わ、わたしは…」

何気なく浩之が口にした「普通の女の子らしく」と言う言葉に、思わず言葉を失ってしまふセリオだった。むろん、その言葉そのものは心地よい類には間違いないのだが、

そういうしてるうちに包囲網は徐々に小さくなっていく。

「いいな、セリオ？」

浩之は再度念を押してから、マルチとセリオを自分の背中に包囲網の一番薄いところを目指して、殴りかかっていた。その片方の手はマルチの手を握って。そしてセリオは小さくうなずいてから、マルチの体をかばうように浩之について行こうとした。

だが、わずかにマルチとセリオの間があいた時。

ナンパ男の一人がすかさずセリオに抱きついてきた。

「あっ…」

本来ならば、このような状況は以前に食器棚を粉砕したパワーが発揮されるのだが、そ

の時はそれがなかった。と言うのも、先ほど浩之が言った「普通の女の子らしく」の言葉のせいである。その言葉に従うのか、基本的な反射に従うのか、セリオの中にかすかに迷いが生じ、結果としては「ご主人様」の意向に沿った道を選択してしまったのだ。

「セリオ！」

「おねーさん！」

浩之とマルチが叫ぶと同時に、浩之は別の男に一撃を食らってしまう。

「うげっ」

「へへへへ」

「ざまあねえよな、色男さん」

「ちょっと、浩之さんに何するの！ あんたたち、ただじゃすまないわよ！」

男の腕に押さえられながら、セリオが叫ぶとまた別の男が笑いながら、

「へえ、ただじゃないなら、いくらだい？」

とまた一発。

「この……」

セリオが言葉を詰まらせて、本気を出そうとした時、またも浩之がそれを制止した。

「セリオ、よせ！」

「でも、このままじゃマルチだつて……」

「浩之さん、しっかりしてください」

浩之のかたわらではマルチが浩之の顔を心配そうにのぞき込んでいるが、そのマルチに男の手が伸びてきた。

「ほい、お前もこっちに來な」

「いやですー」

言葉では逆らってみても、マルチの力は大したこともない上にセリオのような緊急回避行動をとる機構はない。

「マルチ！」

「マルチ！」

セリオと浩之の声が重なり、浩之はマルチを取り返そうと、その男に向かって行ったが、「おや、色男はまだやる気みたいだけど、カノジョたちがどうなってもいいのかな？」

と、一人がいやらしい笑いを見せながら言った。

「ぐ…」

そう言われては浩之は手の出しようがない。浩之がぎゅっと握った拳を止めると、他の男が浩之に殴りかかる。

「ほらほら、色男さん、もっといい男にしてやるよ」

と言ってさらに続けて殴りつける。

こうなってくると、セリオの方もじっとしてるはずがない。いくら浩之に止められたとは言え、その浩之が痛い目にあってるのを放っておけるわけがないのだ。

「いい加減にしないと、わたしも怒るわよ…」

セリオが低くつぶやいた時だった。

少し離れた場所から、一人の男がこちらに向かって疾走してくるのに気がついた。その男はグラサンにアロハと言う怪しい格好ではあったが、それが誰なのかと言うことも瞬時

にセリオには分かった。そして、かすかに笑うと同時にマルチに向かって叫ぶ。

「マルチ、頭を下げて！」

「は、はいっ！」

とマルチがセリオの言葉に従って、頭を下げたところ、そのアロハの男が、まずマルチを捕まえてる男の頭に一撃。次いで、その勢いのままセリオを押さえてる男のあごに右手を掛けて、そのままぐいと。もちろんセリオはその時、頭を動かしてると同時に、瞬間的にフルパワーを出して、押さえていた男の腕を解いてしまっているのだ。その後、アロハの男は、セリオを押さえていた男とともに、激しい水しぶきを上げてプールへ。

男から解放されたセリオはフルパワーのまま、マルチを押さえていた男からマルチを放して、その男をひよいとプールに放り込んだ。

さてさて、浩之の方は二人が解放されたのを知るや否や、それまでやられていた分の仕返しを始めた。

「さて、よくもやってくれたなあ」

低くつぶやきながら周りにいた男どもに浩之は殴りかかっていった。

浩之の実力からすれば、その辺のナンパ男どもがかなう相手ではないのだ。あつと言う間に彼らは戦意喪失し、散り散りになって逃げていった。

「ざまあみやがれ」

得意そうにする浩之だったが、そこにセリオがマルチを支えながら寄ってきた。

「それはいいけど、浩之さん。あまり問題が大きくなるのはよくないと思うから、早めに

ここを出た方がいいと思うわよ。マルチだってちょっとショックを受けてるみたいだし」

「あ、ああ、そうだな。で、お前とマルチは大丈夫なのか？」

「ええ、わたしは別に何とも。まあ、浩之さん以外の男に触られたのはちょっとイヤだね」

「マルチは？」

「はい、何とか平気ですー…」

「それじゃとにかくここを出ましょ？」

「ああ」

と浩之たち三人がその場を去っていった後、先ほどの乱闘騒ぎの中でプールに飛び込んだ怪しい格好の男は、少し離れた場所から三人が出口へと向かうまで目で追っていた。

そして出口の方にはその姿を見失うと、その場で一つため息をついたが、その表情は安堵の色を見せていた。

一方、浩之たちは素早く着替えをすませ『アクア』の外に出てきた時点でようやく一息つくことができた。

「やれやれ…とんだことになったもんだな……」

少しばかり顔に殴られた痕を残した浩之が、さも疲れ切ったように言った。

「浩之さん、大丈夫ですかー？」

その顔の痕にそっと手を当てながらマルチが心配そうに言うのと、さすがに浩之も弱いところを見せたりはしない。

「いや、大丈夫だよ、マルチ。お前こそ、変なことされなかったか？」

体の自由を奪われたと言うのは女の子にとってみれば、心地よいものである道理がない。まして浩之にとつて、マルチはメイドロボであると同時に一人の女の子でもある。もちろん、これはセリオも同様だ。

「浩之さんに比べたら平気です」

そこで笑顔を見せるのは、けなげと言うのだろうか。マルチは優しい笑みを浮かべて浩之に答えるのだった。

それを見て浩之は安心して、歩きだしながら言った。

「それにしても、さんざんだったな…」

すると、それに対してマルチが反論を。

「そんなことないですよー、わたし、本当に楽しかったです」

次いでセリオも。

「そうね。浩之さんこうして出掛ける機会って少ないし、これだけ色々楽しめた日はそうそうないわね」

反論をした二人の表情はともに明るいもので、それを見て浩之も笑いながら言った。

「そっか…、それならいいけどさ。ま、まずはパパさんに感謝ってところか」

すると、セリオも微笑みながら

「ふふ、本当にそうね」

と相づちを打ってくる。そして、さらに言葉が続ける。

「わたしとしても、今日はなかなか楽しい一日だったわ。浩之さんにちゃんと『普通の女の子』として扱ってもらえたものね」



と、にこりと浩之に向かって微笑むセリオ。

「なっ、別に、俺はいつもそのつもりだぞ？」

浩之がその笑顔にどきっとしつつ反論したが、その心の内はセリオには筒抜けだったかも知れない。その証拠にセリオの反応は、

「そお？」

のひとことだけだった。ただし、表情は笑顔のまま。

その笑顔に何も言葉返さずに自分もまた笑顔で答える浩之と、それにつられて微笑むマルチ。

何はともあれ、まだまだ日差しは三人を強く照らしていた、そんな真夏の一日のできごとである。

その後、浩之たちが研究所に戻ると、山本は何故か右手関節部にサポーターを着けていた。

「どうかしたんですか、山本さん」

「あ、ああ、いや、ちょっと……」

と言うように浩之が尋ねてもはつきりとは答えなかったが、浩之もそれ以上気にすることもなく、マルチとセリオを元に戻す作業がすぐに始まった。

そして、浩之が一人で待っていると、山本がふらりとやってきた。

「あれ？ 山本さんはやらないんですか？」

「この腕じゃ、あまりすることはありませんから。それより、どうでした？」

「ああ、楽しかったですよ」

と浩之が答えると、山本は苦笑しながらさらに続けた。

「そりゃよかったです。…あの、実は今回の『アクア』なんですけどね」

「はい？」

「実は……」

と山本が今回の顛末を話し始めた。

このの始まりは一週間以上も前のことで、本当に偶然商店街でセリオに出会った時、セリオが「浩之さんは相変わらずどこにも行こうとしない」と残念そうに言うのを見て、一計を案じたという次第。マルチに入場券を渡したのは当然タイミングを狙ったものであり、二人の水着についてもセリオにさりげなく確認しておき、水中活動用の装備もすぐ使えるように手配をしておいたと言うわけである。

山本の説明を一通り聞いた後、すまなそうにする山本に対して、浩之は笑って答えた。

「ははは、そんなに気にしなくていいですよ。何はともあれ楽しかったですからね」

「そうですか、それならいいですけど…。あ、この話は二人には内緒をお願いします」

「ええ、分かっていますよ」

しらくしてから、マルチとセリオの二人が元の状態になり、あいさつもそこそこ浩之たちは研究所を後にした。

自宅に戻る道行きの中。

浩之が何気なくつぶやいた。

「それにしても、パパさんのあの右手はどうしたのかな？」

すると、セリオが笑い出してしまふ。

「やだ、浩之さんたら、気がつかなかったの？」

「何をだよ？」

「男どもに絡まれた時、助けてくれたのはあの人じゃないの」

「え？」

「あの右手はわたしを捕まえてた男を、プールに落とす時に痛めたんじゃないかしら。あの人って体格もいいし、腕力もそれなりにあるけど、さすがにあれは無茶してたと思うもの」

「何だ、そーだったのか…。道理で事情をよく知ってると思ったよ」

と浩之があきれたように言ってるところに、セリオがそっと浩之の耳元でマルチには聞こえないようにささやいた。

「それに今回の『アクア』はあの人じゃ組んだことでしょ？」

「いつ？ 何でお前それ……」

驚いた浩之がセリオの方を見ると、セリオはそこで「やっぱり」と言うような表情を見せていた。

「一体何を話してるんですか？」

そこにマルチの声が重なると、セリオはにっこりとしながらマルチに、

「ううん、何でもないので、マルチ」

と答えるのだった。

「セリオ……お前、まさか……」

山本が動き出すと踏まえた上で、山本に愚痴をこぼしたのではないか？ そんな疑問がふつと浩之の頭にわいてきたが、苦い表情の浩之と違ってセリオは微笑みながら、こう答えるだけだった。

「今度は海にでも行きたいって、あの人に漏らそうかしらねえ？」

「セリオ……………」

絶句する浩之。

さっぱり話が分からずにきよんとするマルチ。

相変わらずの微笑みを見せるセリオ。

そんな三人の遙か頭上には、まだまだ暑い夏は続きそうな予感をさせる澄んだ青い空と、激しい嵐を呼びそうなもくもくとした入道雲があった。

いずれにしろ、まだまだ夏は終わりそうになかった。

(了)

説明

本編で出てきませんでしたが、セリオのサイズは、T165/B84/W55/H85で、体重はヒミツです。

マルチのサイズについてはちょっと適当な資料がないので、分かりません。今どきのサイズで考えると、小学生高学年〜中学生程度であるとは思いますが、その辺の平均的なサイズ（の低い方）を想定しています。

作品そのものは完全に「夏」を意識してるものですが、今年の夏は皆さんもご存じの通りすっきりしないものでした。まあ、作品の中だけでも…と想って頂ければ幸いです。

a s h

書出:1998/08/21

初版:1998/09/11

PDF書式変更:2016/05/11